



ニューノーマルな韓国・朝鮮語授業に向けて：  
ネット配信授業の実践

メタデータ	言語: ja 出版者: 日本韓国研究会 公開日: 2022-09-06 キーワード (Ja): ネット配信授業, 非対面授業, 韓国・朝鮮語授業, Teams キーワード (En): 作成者: 趙, 智英 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10466/00017813">http://hdl.handle.net/10466/00017813</a>

# 日本韓国研究

特集号 | コロナ禍の韓国・朝鮮関連授業の実践報告

ニューノーマルな韓国・朝鮮語授業に向けて  
— ネット配信授業の実践 —

趙 智英

2021年3月31日

日本韓国研究会  
Japan Association of Koreanology



# ニューノーマルな韓国・朝鮮語授業に向けて

## — ネット配信授業の実践 —

趙 智英（同志社大学）

### <要旨>

本稿では筆者がネット配信（非対面）で行った韓国・朝鮮語授業の実践方法と今後の課題について報告する。本授業は Forms で作成した課題と専任教員が作成した教材を学生に提示する資料提示型と Teams のビデオ会議で課題のフィードバックと質疑応答、発音練習、小テストを実施する双方向型を組み合わせた。メールや Forms 回答集計機能を活用し、学生へのフィードバックを行い、期末試験はハイブリッド型で実施した。今回の実践を通じて(1)ツールを利用した横の繋がり、(2)長期的なネット配信授業のための環境構築、(3)安全性と公平性の保障などが課題としてあげられた。今後は授業や試験などを非対面で行うことを想定し、授業担当者は学内の取り組みや学生支援に関する情報を把握しツールの利便性を活かしたコミュニケーション方法を模索する必要がある。また、安全性と公正性を保障するためには授業担当者との信頼関係を築き、学生の意識の向上を図ることが重要な課題となる。さらに、授業担当者が指導方法や学生との向き合い方に工夫を凝らしていく必要があり、学生のみならず授業担当者の意識の向上も今後より一層求められる。

**キーワード** ネット配信授業、非対面授業、韓国・朝鮮語授業、Teams

### 1. はじめに

2019年に発生した新型コロナウイルス感染症（COVID-19）はあらゆる分野に大きな影響を及ぼした。教育機関も例外ではなく、多くの大学が感染症対策や非対面授業を余儀なくされた。本稿では、このような状況下で筆者が韓国・朝鮮語授業を担当するにあたって資料提示型に双方向オンライン型を取り入れたネット配信授業の実践について報告し、授業実践により見えてきた課題と今後の対応策について述べる。

## 2. 背景

昨今の情勢の下で時たま耳にするようになったニューノーマル（新しい生活様式）は、もとは 2007 年から 2008 年にかけてのリーマンショックを含む世界的金融危機の際にビジネスや経済学の分野において使われた言葉である。福原（2021）によると、ニューノーマルは「「有事」が「平時」に取り込まれること、これまでの「当たり前」が大逆転し、新しい「当たり前」が成り立つこと」を意味する。大勢の学生が教室に集まり授業を受ける光景が当たり前だった時代から、ネット配信授業を受講する学生が、一定の距離を保ち、飛沫感染防止のため同じ方向を向いてパソコンの画面を眺める光景がニューノーマルな当たり前となったのである。

あらゆる当たり前が逆転しはじめた頃、筆者が所属する大学では、感染症拡大に係る政府の緊急事態宣言の発令や各都道府県の不要不急の外出や他地域との往来自粛要請を受け、大学キャンパスへの入構制限や図書館を含む大学各窓口閉鎖などの措置を講じ、春学期はすべての授業を非対面（ネット配信）で実施した。ネット配信授業は大きく資料提示型、動画配信型、双方向オンライン型の 3 種類に分けられた。資料提示型授業は資料と音声データが提示される授業を含む各種資料の提示により行う授業である。動画配信型授業はあらかじめ録画された授業の動画を視聴する方法（オンデマンド）を指す。双方向オンライン型授業（以下、双方向型授業）は Teams<sup>1</sup>、Zoom<sup>2</sup>などのビデオ会議アプリケーションを使って、授業担当者と学生が同時にアクセスし、リアルタイムでコミュニケーションを取る授業である。

秋学期は、対面授業とネット配信授業の 2 形態を基本として開講された<sup>3</sup>。春学期と同様、ネット配信授業には資料提示型、動画配信型、双方向オンライン型がある。

筆者が担当した「コリア語応用 1」、「コリア語応用 3<sup>4</sup>」（以下、本授業）は初修外国語科目の一つで、1 単位、週 1 コマ（90 分）、半期 15 回で中級の文法項目を学習する授業である。初修外国語科目は専任教員で構成される教務委員会が定めた方針により資料提示型のネット配信授業が推薦された。会話の授

---

<sup>1</sup> Microsoft 社が推奨する Microsoft365 のコミュニケーションツール

<sup>2</sup> Zoom ビデオコミュニケーションズが提供するクラウドコンピューティングを使用した Web 会議サービス

<sup>3</sup> <https://www.doshisha.ac.jp/news/2020/0806/news-detail-7767.html> 参照（最終閲覧日 2021 年 3 月 11 日）。

<sup>4</sup> これらの授業では中立性を保つため英語の Korea を借用している。本稿では『日本韓国研究』特集号のテーマの表記に従い韓国・朝鮮語とする。

業や上級科目については、Web会議システムを使った双方向型授業を行う場合もあり、受講生数が教室着席時に前後左右1m以上の間隔を空けた定員に収まる場合は対面での授業が可能であった。

### 3. 実践方法

#### 3.1 授業計画および使用ツール

本授業は中級の文法項目を学習し、辞書を用いて新聞の論説文のような定式的な文章から、散文で書かれた長文、短い小説などが読めるようになることを到達目標とした。各々半期 15 回の授業と期末試験で構成され、教科書は『実用韓国語 2』<sup>5</sup>を使用した。春学期は平常点 40%（課題 20%、小テスト 20%）、期末試験 60%の合計 100 点で評価したが、評価基準を検討しなおし、秋学期は平常点 60%（課題 20%、単語テスト 5%、小テスト 35%）、期末試験 40%の合計 100 点とした。

先述した通り、学生が教室で授業を受けることができるのは着席時に前後左右 1m以上の間隔が確保できる授業のみであるため、登録者数が 20 人を超えた本授業は教務委員会が定めた方針により一年を通じてネット配信授業を行った。具体的には、教科書の内容をもとに専任教員が音声データを挿入したパワーポイント資料（以下、教材）を作成し、授業担当者が大学が提供している独自の学修支援システム上に教材と課題を提示し、学生へのフィードバックやコミュニケーションはメールやコミュニケーションツール Microsoft Teams（以下、Teams）を利用した。課題は Microsoft Forms<sup>6</sup>（以下、Forms）を活用したクイズ形式で作成および提出を行った。種々のコミュニケーションツールがある中で Microsoft のツールを使用した理由は、充実した機能や使いやすさだけでなく、大学が Microsoft のソフトウェアライセンスを提供しているからである。そのため、授業担当者、学生は Teams や Forms はもちろん Outlook、Word、Excel、OneNote などの Microsoft 365 アプリケーションを無償で利用できる。特に Teams や Forms は大学から交付されたユーザ ID、パスワードで認証を行わなければアクセスできないように設定することができるため、セキュリティの観点から後述する双方向型授業や小テストにも Teams を活用した。

<sup>5</sup> コリア語教材研究会（2013）『実用韓国語 2』改訂第 3 版、同志社大学生協書籍部

<sup>6</sup> アンケートや投票、クイズ、テストなどの作成、共同作業が可能な Microsoft 社が推奨する Microsoft365 のアンケート作成ツール

### 3.2 Forms 課題とフィードバック

資料提示型の授業は学生の学習態度や内容理解、自己効力感を測定することが難しいため、授業の進度に応じて、学生の理解度を測るために初回のオリエンテーションと最終回を除く 13 回分の課題を作成しフィードバックを行った。課題として、授業の進度に沿って学習した文法、文型、新出語彙を用いた選択式と記述式のクイズを Forms で作成したものを「Forms 課題」とし、次回授業までに回答するように指示を出した。

Forms は自動的に回答集計を行う機能が搭載されている。作成者側は回答者の回答開始時間、回答終了時間、学生 ID、個人の回答率、全体の回答率を確認できる。ブラウザでは図 1 のようにグラフと数値で表示され、クイズの作成データと回答データは Excel にエクスポートすることができる。

Forms の回答データを確認し、毎週の課題の提出期限内に回答を提出しなかった学生には個別連絡をし、課題提出の評価を減点とした。最も誤答が多かった設問については、後述する双方向型授業の際に画面共有で教材を一緒に見ながら解説し、メールでの質問は常時受け付けた。

図 1 Forms 課題の回答集計画面 ※筆者一部修正

次のうち、漢字とそのハングル表記（韓国式）の組み合わせで、ハングル表記が誤っているものを選びなさい。（5 点数）

回答者の 86% (31/36) がこの質問に正解しました。

- |  |      |
|--|------|
| <input type="radio"/> 논리 (論理)            | 1    |
| <input checked="" type="radio"/> 피부 (皮膚) | 31 ✓ |
| <input type="radio"/> 관리 (管理)            | 4    |
| <input type="radio"/> 인식 (認識)            | 0    |



次のうち、引用文の縮約形の活用が間違っているものを選びなさい。（5 点数）

回答者の 36% (13/36) がこの質問に正解しました。

- |  |      |
|--|------|
| <input checked="" type="radio"/> 안 돼요 — 안 돼내요. | 13 ✓ |
| <input type="radio"/> 비싸요 — 비싸내요.              | 2    |
| <input type="radio"/> 잊어버리다 — 잊어버리내...         | 5    |
| <input type="radio"/> 닦았어요 — 닦았내요.             | 16   |



次の文章の括弧（ ）の中を活用するときに最も適切な接続表現を選びなさい。  
「쓰레기를 ( 버리다 ) 갖대요。」（5 点数）

回答者の 72% (26/36) がこの質問に正解しました。

- |  |      |
|--|------|
| <input type="radio"/> -기 때문에           | 6    |
| <input type="radio"/> -(이)나            | 1    |
| <input type="radio"/> -게               | 3    |
| <input checked="" type="radio"/> -(으)러 | 26 ✓ |



授業開始時のアンケート調査で、パソコンやスマートフォンのキーボードでハングルを打つことができない学生がいたため、Formsの課題は回答にハングルを書かなければならない記述式クイズは出題せず、13回目以降はForms課題に加え、それまで学習した文法を使った短い文章を韓国・朝鮮語で作文する課題を出した。手書きで書いた文章の写真を撮り、画像ファイルをメールまたは学修支援システム上に添付して提出する方法をとった。

### 3.3 資料提示型と双方向型授業の併用

資料提示型授業は、学生にとって受講のための大学への移動が不要で、時間や場所に制限されず、一定の期間に何度も見返すことができるという利点がある反面、お互いの顔も、声もわからないまま、ネット上に掲示された教材を確認し、課題を随行する。授業参加度を評価できない代わりに自ずと課題の量が増え、寝る間を惜しんで課題に取り組む学生も多いだろう。授業担当者にとっても、課題の回答提出状況だけで学生の理解度を確かめるのは難しく、リアルタイムでコミュニケーションを取る機会がなければ学生からのフィードバックを受ける機会は減る一方である。

そこで、教材の各課の学習が終わる毎に課題のフィードバックと質疑応答、発音練習、小テストのために Teams のビデオ会議で半期 15 回のうち 8 回（フィードバックと質疑応答、発音練習を兼ねて 4 回、小テスト 4 回）は双方向型授業を行った。小テストは試験問題の流出防止のために画面共有で問題を見せた。学生には回答用紙（ノートまたは紙）と筆記具を用意し、パソコンの内臓カメラや Web カメラで上半身、手元、回答用紙が見える状態で受験し、手書きの回答を画像ファイルにし期限まで提出させた。中にはパソコンとスマートフォンで同時にビデオ会議にアクセスし、カメラで自身を映しながらスマートフォンで画面共有された問題を見て回答を作成する学生も多数いた。

### 3.4 ハイブリッド型の期末試験

半期の授業が終了した後は、学習した内容に関して総合的に判定するために期末試験を実施した。春学期は 15 回の授業が終了した後に別途実施日を設けた。定められた日の一定時間、試験問題を学修支援システム上に掲示し、回答を画像ファイルにして同システムに提出させたが、不正行為やセキュリティ問題を考慮し、秋学期は 15 回目の授業時間に期末試験を対面で行った。

期末試験を行う際は、学生が密集しないように 1m 以上の距離が確保できる大教室で実施し、マスクやフェイスシールドの着用、発話を控えるなど感染症拡大リスクを低減するために徹底した。しかし、自宅から大学までの移動や教室の外での感染については防ぐ手立てがなかなか見当たらない。さらに、期末試験を実施した時期に感染拡大により京都府に緊急事態宣言が発出されたことを

受け、大学は基礎疾患や持病があったり、感染した場合に重症化するリスクの高い学生、同等の事情により感染した場合に重症化するリスクの高い同居家族がいる学生、感染リスクに鑑み出校したくない学生に対しては通学を強要せず受講・受験機会確保などの配慮を行うという方針を決めた。このような経緯から、期末試験当日まで代替課題やネット配信での受験を要請する学生からの連絡が絶えず、期末試験は対面と非対面のハイブリッド型で行うことに決め、対面試験当日に希望者に限り期末試験問題を当該学生のメールに送信し、回答の画像ファイルを期限内に提出することにした。

## 4. 今後の課題と対応策

今回の実践を通じていくつかの課題が浮き彫りになった。その課題とは、(1) ツールを利用した横の繋がり、(2) 長期的なネット配信授業のための環境構築、(3) 安全性と公平性の保障などである。

### 4.1 ツールを利用した横の繋がり

前年度まで対面で行ってきた授業を非対面を実施するにあたって、講義系、実技系など授業の内容を考慮しネット配信授業の方法や使用ツールは特に制限されなかった。ネット配信授業の開始に伴い、Microsoft だけでなく Zoom アカウントもライセンス付与の対象となり、嘱託講師を含む教職員は 300 人までのビデオ会議が時間無制限で無償利用できるようになったこともあり<sup>7</sup>、授業担当者によって授業に関する各種連絡、資料や課題の提示、課題やレポートの提出、動画ファイルの格納、双方向型授業の実施などには複数のツールが利用された。

授業担当者としては最低限の使用ツールだけ知っておけば良いが、ネット配信授業をいくつも受講する学生は、授業毎に異なるアプリケーションをダウンロードしたり、複数のツールを駆使して連絡事項や課題の確認をしなければならない。そのような状況から学生は授業担当者からの情報伝達を受け取るだけで精一杯で、今回、資料提示型に加え Teams での双方向型授業も行ったが、双方向とはいえチャット機能や引用返信、学生からの画面共有で質問事項を共有するといった方法はあまり活用できなかった。

対面での授業では、理解ができていのかどうか学生の様子を窺い、その場で補足したり応用問題を出して一緒に解いてみたり、学生と学生が教え合うことで「横の繋がり」ができ、互いに理解を深めることができた。非対面でも会議

---

<sup>7</sup> 300 人以上の登録者がいる授業担当者には 300 人以上のミーティングが可能なライセンスが用意された。

チャットや掲示板などで学生からの質問や授業担当者からの補足を共有して他の学生の理解も補えることを期待したが、今回はメールで質問を受けることが多く、1対1の質疑応答を授業担当者が他の学生に共有するという一方の情報伝達になってしまった。

これからは対面、非対面を問わず様々な場面でコミュニケーションツールが活用されるであろう。次回は授業開始時に学生にどのようなツールが使いやすいかアンケート調査を行い、授業担当者からツールの機能や使い方を説明する十分な時間を設けようと考えている。ツールの利便性を活かしたコミュニケーションに適応し、活発なやり取りと学生間の繋がりを大事にしたネット配信授業を目指したい。

#### 4.2 長期的なネット配信授業のための環境構築

2020年度は大学において様々な工夫とサポートが行われた。パソコン、タブレット、スマートフォンなどを無線でインターネットに接続するためのWi-Fiルータの貸出、学内でネット配信授業を受講する学生のための自習室の開放、ノートパソコンの貸出といった受講環境のサポートや、学習支援コンテンツの提供、オンライン学習相談<sup>8</sup>などの全学的な学習支援施策などである。

また、文部科学省が設けた学生支援緊急給付金の周知はもちろん、2020年度は学部学生・大学院学生を対象とした給付制の奨学金や短期貸付金制度が設けられ、学びを保障するための取り組みがなされていた。

しかし、学内の情報教室、PCコーナーでデスクトップパソコンや貸出用のノートパソコンはWebカメラやマイクが内蔵されていない。本授業ではビデオ会議で小テストを行う際、不正防止と学生間の不公平感を生まないために学生に必ずカメラをオンにするよう指示した。小テストを受験する姿が確認できない場合は無効になる旨を事前に周知したにもかかわらず、Webカメラとマイクを用意しなければならないことを知らずに大学のパソコンを使ってカメラを付けないまま小テストを受験する学生がいた場合は別日にカメラを用意して追試を受けさせた。

同じ日に対面授業とネット配信授業がある学生は、学内でネット配信授業を受講できる空き教室探しや移動に加え周辺機器も持参しなければならない。このような状況が続くと学生にとって負担になり、モチベーションの低下に繋がる恐れがある。そのため、長期的にネット配信授業に対応できる学内の学習環境や設備を整えるのはもちろん、サポートを必要とする学生に適切な案内ができるよう、授業担当者も学内の情報を把握すべきであろう。

---

<sup>8</sup> 同志社大学 学習支援・教育開発センター (2021) 『CLF report』 32、同志社大学 学習支援・教育開発センター、p. 6.

### 4.3 安全性と公正性の保障

最後に、学生の安全性と公正性について考えたい。春学期に非対面で行った期末試験は学生間の試験問題の共有や不正行為の可能性があり、公正性が保たれなかったと判断され秋学期は対面で期末試験を行ったが、感染拡大により対面で期末試験を実施している間に希望者は非対面での受験を許可することになった。不正行為防止のために対面試験と同時間帯に非対面試験を行ったが、授業担当者一人で大教室で対面の試験監督をすると同時に、ノートパソコンの画面越しに非対面受験の監督をすることが難しく、やむを得ず非対面で受験する学生にはメールで試験問題を送信する方法を取った。公平性を最大限担保するために、非対面の試験問題は対面試験と同様の出題形式と試験範囲内の文法・句型項目を出題し、語彙や語句を変え、試験範囲内で短い読解や作文を追加出題したが、学生が不正な手段を用いて回答を作成する可能性は否めない。最終的な成績評価基準は、対面であれ、非対面であれ変わらない。このような不透明性は学生の不公平感を生みかねない。

非対面の試験は常に公正性、公平性を巡って議論される。特に期末試験のような学習成果を総合的に評価する試験は成績に直結するものであり、公平性を確保すべきである。しかし生活様式や意識が大きく変化した今、授業担当者は成績評価に係る課題や試験などは非対面で行うことを想定しておかなければならない。

このような状況でいかに安全性と公正性を保障するかは、学生の倫理観の向上が最も重要な課題となる。内山（2021）は自粛下での良心の働きについて論じる中で、共感性により他者のダイナミックな視点を理解することにより、受動的で画一的な他者理解から真の理解へと進み、自粛の意義の理解を深めて行動基準を内面化することにより主体的な行動制御が実現すると述べる。自身が置かれた状況での主体的な行動制御は学生の非対面による受験にも求められることである。

そこで学生の意識向上のために授業担当者ができることとして、採点基準の見直しや成績評価基準の策定があげられるほか、授業担当者と学生との信頼関係、共感性を育むことが一つの手掛かりになるのではないだろうか。学生一人一人が学習へのモチベーションや達成感を得ることで意識の向上に繋がるように、そして学習内容の振り返りと学生自身の理解度の確認という本来の試験の意義を再認識するように、授業担当者は指導方法や学生との向き合い方に工夫を凝らしていく必要がある。そのためには、学生のみならず授業担当者の意識の向上も今後より一層求められるであろう。

一方、感染拡大により大学が決めた受験機会確保などの方針について、対面で期末試験を受けた学生からは、大学がそのような配慮をしていることを知ら

なかったという声が上がった。また、学生支援のために大学が提供しているサポートを知らず利用しなかったという意見もあり、より多くの学生に学内の情報が行き届くよう周知方法を工夫する必要性を感じた。繰り返し述べるが、大学に赴き、対面で情報が得られる機会が減ったからこそ、授業担当者も学内の情報収集と学生への声掛けを怠らないよう心掛けなければならない。つまり、授業担当者と学生のコミュニケーションを図るためのツール活用は不可欠なのである。

## 5. 終わりに

以上、筆者がネット配信で行った韓国・朝鮮語授業について、使用ツールや資料提示型・双方向型授業の併用、期末試験の実施方法などを報告し、今後の課題と対応策について述べた。

本授業では、資料提示型と双方向型を組み合わせることにより、学生の理解度を確かめると同時に授業担当者と学生、そして学生間のコミュニケーションを試みた。実践を通して見えてきた課題として、ツールの機能を活用した双方向コミュニケーションの工夫、学内でネット配信授業を受講する学生のためのより快適な環境の構築、ネット配信授業における学生の安全性と公正性、公平性の保障などがあげられた。

特に非対面による課題や試験、成績評価を行うにあたって懸念される公正性、公平性の問題は、授業担当者、学生の信頼と共感性を育み、学生に期待すべき倫理観を向上させることで僅かに解消できるのではないかと考える。さらに、非対面でも透明な管理、監督が可能な試験の実施方法や評価基準を検討すべきだと再認識する機会となった。

また、ネット配信授業は学生の学習環境や通信環境を考慮し、臨機応変に対応しなければならない。学内の支援制度や設備について把握し、学生に適切な案内をすることも授業担当者も役割だと感じた。

今回の実践を、一時しのぎではなくこれからの授業のあり方を考えるための過渡期とし、対面であれ、非対面であれ、どのような形態であれ、学生の学びを促進させる授業づくりを目指したい。

## <参考文献>

コリア語教材研究会 (2013) 『実用韓国語 2』改訂第 3 版、同志社大学生協書籍部  
福原紀彦 (2021) 「濁流のなかに清流を見極める姿勢で築くニュー・ノーマル」

『IDE : 現代の高等教育』627、IDE 大学協会、pp. 19-22.  
同志社大学 学習支援・教育開発センター (2021) 『CLF report』32、同志社大学  
学習支援・教育開発センター  
内山伊知郎 (2021) 「行動制御の心理と良心」同志社大学 良心学研究センター編  
『パンデミック時代における良心』良心学研究センター、pp. 116-123.

著者名 : 趙 智英 (Jiyoung Cho)

連絡先 : cjiyoung1120@gmail.com

- ・受付 : 2021 年 3 月 25 日
- ・修正 : 2021 年 3 月 29 日
- ・掲載 : 2021 年 3 月 31 日



# 日本韓国研究 特集号

---

発行日 2021年3月31日

発行 日本韓国研究会

〒599-8531

大阪府堺市中区学園町1番1号

大阪府立大学 高等教育推進機構

電話 072-254-9655

メール(事務局) [jak.jimu\(at\)gmail.com](mailto:jak.jimu@gmail.com) \*(at)は@に変更してお送りください。

ホームページ <http://jak.main.jp/> (入会手続きは[こちら](#))

編集 趙智英 崔銀景

---

日本韓国研究会   
Japan Association of Koreanology